

学校文化を創造する学校改善・授業改善に向けた実践研究

村田 耕一*

Practical research of the school and the class improvement activities for creating
better school cultures in elementary school

Koichi MURATA

キーワード：授業改善、系統的な環境教育、地域学習、教職員の組織力

1 はじめに

昨今、人口減少・少子高齢化、グローバル化の進展など、社会状況が大きく変化していくことが予想される。このような社会を生きる子どもたちに「たくましく生きる力」を育むためには、基礎・基本の知識や技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等の活用する力等、「確かな学力」を育む必要がある。併せて、学習意欲や学習習慣、問題解決的な能力、豊かな人間性、自然や地域と共生する力等、「確かな学力」の基盤となる「学ぶ力」を育成することも重要である。

各学校においては、その点を踏まえ、学校経営のビジョンを明確にもつとともに、それぞれの学校や地域の特色に応じた取組の柱を位置付け、教育課程の編成を行う必要がある。また、全教職員が「チーム学校」としての議論を重ね、共通理解と共通実践を図り、不断の授業改善を進めることにより、全ての子どもたちが、「わかる」「できる」喜びを実感できるようにしていくことが大切である。

本論文は、私が平成 26 年度に教頭として赴任していた天津市立雄琴小学校での学校改善・授業改善の取組についてまとめたものである。本校においては、「一人ひとりの学ぶ力を高める授業改善」、「地域の特色を活かした系統的な環境教育の推進」、「ふるさとを愛し、自らの生き方を考える子どもを育む地域学習の推進」を柱に教育実践に取り組んできた。また、「チーム雄琴」としての教職員の連携や地域の支援など、人が育てる教育としての推進も行ってきた。それらの取組について記すとともに、今後の学校教育において何が必要なのか。子どもたちをどのように育てていく必要があるのかについて考えていきたい。

2 一人ひとりの学ぶ力を高める授業改善

天津市立雄琴小学校では、これまでから「確かな学力をもち、自ら学ぶ子どもの育成」を研究主題に、学習の基礎・基本の定着、自ら学ぶ学習集団づくりに取り組んできた。平成 25 年度からは 3 年間にわたり、滋賀県教育委員会の「学力向上アプローチ事業」の指定を受け、全国学力・学習状況調査の結果を基に、付けたい力を明確にした評価問題の作成を通して授業改善の方法を研究し、学力向上へのアプローチを行ってきた。

平成 25 年度の授業改善の取組については、以下の内容を中心に推進した。

* 滋賀県教育委員会事務局学校教育課

「つなげる」をキーワードに取組を展開

- ・課題と児童を「つなげる」
課題の提示や発問の工夫改善とともに ICT の活用
- ・児童と児童を「つなげる」
交流場面での学習形態の工夫(グループやペア学習の推進)

自らの考えをもつためのノート指導の推進

その後の全国学力・学習調査の結果分析において、子どもたちの表現する力、とりわけ説明する力に課題が見られたことから、平成 26 年度の校内研究の主題では「自ら考え、学び合う子どもの育成」～「表す・説明する」算数的活動の充実～を位置付け、授業改善を中心に取組を体系化し、子どもたちの「学ぶ力」の育成に取り組んだ。

(1) 平成 26 年度取組の内容

基礎・基本の知識や技能の定着を土台として、説明する力の育成に取り組むことで思考力、判断力、表現力等の活用する力を育む。

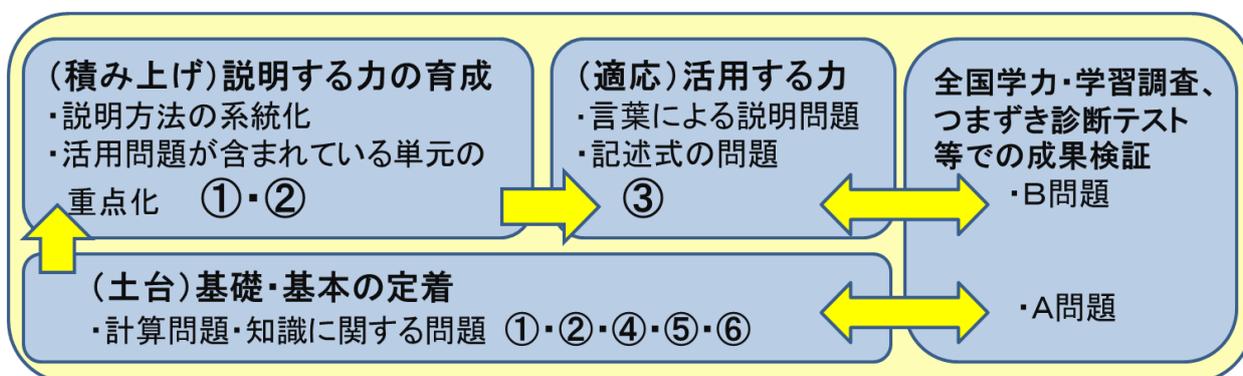


図1 平成 26 年度の校内研究の体系図

<取組の6つの柱>

- ①授業改善 ②ノート指導の充実 ③評価問題の作成 ④夏の算数教室
⑤ステップアップタイム ⑥家庭学習の推進

学ぶ力の土台の部分として、計算問題や知識に関する内容など、基礎・基本の知識や技能の習得とその定着を図るとともに、その上に積み上げる部分として説明する力の育成を図り、そのことを通して、記述式の問題等でも必要となる「活用する力」を高めていくこととした。そして、それらの力の検証として、評価問題とともに、全国学力・学習状況調査のA・B問題、県作成の「つまずき診断テスト(現在・学び確認テスト)」を活用することとした。

また、それぞれの内容についての向上に関わり、上記の①～⑥の6つの柱の取組を関連させながら推進することとした。

6つの柱による取組の内容

①授業改善

- ・基礎・基本の定着をめざし、「公式・計算のきまり・考え方」などの各学年で身に付けさせるべき学習内容については、必ず身につけさせていくようにする。
- ・説明の仕方について考え、その学習を繰り返すことで定着を図る。
順序立てる・算数的用語を用いる・絵や図を使うなど
- ・活用問題を扱う単元の学習を研究授業の中で取り上げて実践研究していく。

多様な考えが引き出せるような学習課題や授業展開、学習のまとめやふりかえりを行う。

- ・ 単元や単位時間での付きたい力を明確にし、課題解決的な学習を行う。



自力解決の段階での **ヒントカード**

子どもたちが、自力解決していく際一人ひとりの学習状況に応じ、解決のヒントなるカードを用意し、その内容を参考に、自分なりの解決方法を見つけ出せるように支援を行った。

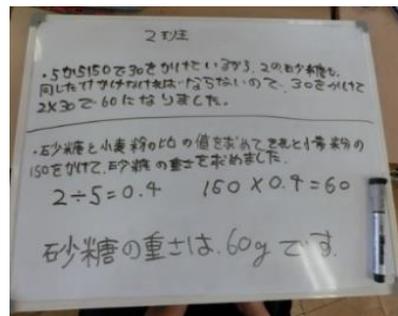
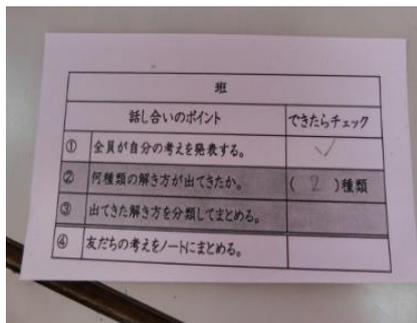


写真1 グループ学習チェックカード 写真2 ホワイトボードによる意見の整理

グループ学習での **チェックカード**

自力解決した内容をグループ等で意見交流する際、そのままにしておく、意見を出し合うだけに終わってしまう。そのため、「何種類の意見が出てきたか。」や「出てきた解き方を分類してまとめる。」「一つの考えに絞り込む。」「考えをまとめる。」等、学習の内容や付きたい力に応じて、話し合いの方法を規定することとした。そのことにより、議論の活性化とともに話し合う力も付けることができた。また、ホワイトボード等を使用することにより話し合いの内容を可視化することも考えを深めることにつながった。

② ノート指導の充実

子どもたちの基礎・基本の知識や技能を確実に身に付けたり、自力解決において自らの考えをまとめたりするためには学習ノートの指導が大切である。本校では、平成25年から、研究の柱の一つにノート指導に力点をおき取り組んできた。全校で系統的な指導を行うため、各学校でのノート指導の取組をもちよりながら、共通項目を設定するとともに、どの学年にはどのような書き方をすればよいかについて検討を重ね、ノート指導のスタイルを作っていた。本校の算数科の指導において決まった共通事項は以下の内容である。

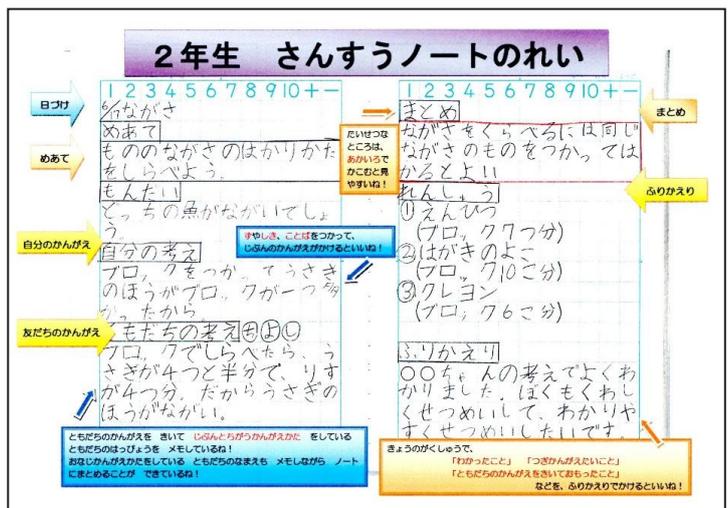


図2 学習ノートの例

- ・ 学習の日付→ノートを振り返るときに必要
- ・ めあて→学習のめあてを書くことで、学習の目的を意識するとともに、学習のまとめ等において、めあ

てに対しての自分の考えをまとめる。算数科の場合、問題を提示してから、その問題を意識した上でためあてを確認していく学習展開をとることとしていた。

- ・自分の考え→図や式、言葉等を使って、自分の考えを書き表すようにする。既習の学習内容を思い起こしてメモするなどして自分の考えをまとめるときのヒントとする。
- ・友達の考え→グループやペアでの意見交流をもとに、自分の考えと違う部分をまとめる。
話し合いを通して、考えを整理したことを記録する。
- ・まとめ→学習をとおしてポイントとなる部分等をまとめる。
- ・練習→まとめたことをもとに、練習問題に取り組み、自らの学習を評価する。
- ・ふり返り→学習を通して、「わかったこと」や「次に考えたいこと」、「友達の考えを聞いて思ったこと」等を書きとめ、次への課題を見つける。

このノート指導を全学級で行うことは、課題解決的な授業スタイルを共通実践することにつながる。併せて、他教科や家庭学習でのノート指導にも生かすようにしていった。

また、子どもの作成したノートの例を集めプリントにし、配布することを通して、他の子どもたちのモデルとするとともに、家庭においても子どものノートを確認してもらえるようにした。

③評価問題の作成

学習単元の最後に行う評価問題に、説明する力を見取るための問題を作成することとした。このことにより、教師が単元構成を考える際、子どもたちへどのような力を付けておくべきかを明確にすることができる。とともに、この評価問題を解くことができるようにするためには、どのような単元での指導が必要なのかを段階的に考えることができ、授業改善や指導の工夫へとつながった。

④夏の算数教室（児童の半数以上が参加）

夏期休業中を利用して、一学期学習した内容の補充を行うことや、夏期休業中の学習習慣を作ることを目的に、4・5・6年生児童を対象とした算数教室を実施した。子どもたちには、これまでの学習で苦手だった部分をふり返り、その部分を中心に学習プリントを選択。自分のペースで問題を解いていく。各学年の教室には学年以外の複数教師が入り、個別に指導を行うこととした。連続で5日間実施し、多くの児童が参加した。

また、算数教室の後には水泳教室も行い、午前中にその両方に参加し生活のリズムを学期から夏期休業へスムーズに移行させるようにした。



写真3 夏の算数教室

⑤ステップアップタイム

始業前の朝の時間を活用し、毎週金曜日 15分程度、算数や国語の基礎・基本の内容の復習を行った。月曜日～木曜日は、朝の読書や読書ボランティア、教師による読み聞かせを行い学習の習慣作りとともに、落ち着いた時間を作ることで1時間目の学習へスムーズに進めるようにした。

大津市立雄筆小学校 家庭学習のすすめ

☆ご家庭での会話を大切にしましょう

子どもたちは、楽しんでくれています。ゆっくり話を聞いてあげることで、自然に学習が進みます。自分の言葉で話をできるように努めます。家庭学習や夏休みの課題の進捗について定期的に話し、助けてあげてください。

☆学習の習慣を身につけよう

毎日継続して家庭学習ができるように、勉強時間を守ります。毎朝聞いて家族学習ができる環境を整えてあげてください。

☆下学年は宿題をきっちり、上学年は毎週一冊ノートで自主的な家庭学習の習慣をつけよう

下学年では、まず宿題をきっちりすること、そして、学年が上がるにつれて、自学（自主学習）ノートでの自主的な学習の機会を増やしていきます。自学ノートの進捗状況、学習時間だけでなく、中学校での家庭学習（課題や宿題の進捗など）についても話します。

☆家庭での読書タイムをつくりましょう

読書は心を豊かにするだけでなく、学力の向上にも大きく貢献します。家庭で読書タイム、ノートに読書感想文や、読書習慣を身につけるための取り組みを行う習慣をつけましょう。大人と一緒に読書をし、その読書内容について話してあげてください。読書は、読んだ本の感想などについて語り合うのも、とてもよい機会になります。

●学習のやりかた

1. つくえの上をきれいに拭き、学習に必要なものを取り出します。
2. トイレや手洗いなどをして準備を整えます。
3. だらだらとやるのではなく、時間を決めて集中して学習します。

●自主学習ノートの活用

1. 漢字や計算を、少しづつでも毎日やるようにします。
2. 学年が上がるにつれて学習のレベルを上げていきます。
3. ドリル学習は、「答え合わせ」や「復習」もやるようにします。
4. 分からないところは、おうちの人の先生に聞くようにします。

●学習の時間

○曜日ごとに学習の進捗を決めましょう。

○できることが増えるようにしましょう。（無理にしない）

○朝の読書や読書ボランティアの時間を活用しましょう。

○早くては遅くは、毎日の学習習慣を身につけるように学習を進めましょう。（各自の状況に応じて調整してください）

曜日	月	火	水	木	金	土	日
読書の時間	時	時	時	時	時	時	時
学習時間	時	時	時	時	時	時	時

※学習時間：20～40分 40～60分 60～90分

※自分の学習時間

学年 1, 2年 3, 4年 5, 6年 自分の学習時間

学習時間 20～40分 40～60分 60～90分 分

おうちの人とよく話し合ってください！

図3 家庭学習のすすめ

⑥家庭学習の推進

学ぶ力の向上については、学校だけでなく、保護者との連携が大切であることから、PTA総会において、校内研究での取組について説明するとともに、「家庭学習のすすめ」を見直し、その発行による家庭学習の啓発を行った。

(2)「学ぶ力」をステップアップ ～日常的に「書く力」を高める取組～

算数科においての授業改善を中心に取組を進めてきたが、平成26年度の全国学力・学習状況調査の結果で明らかになった課題をもとに、学ぶ力向上に向けたPDCAにおける再検証を全教職員で行い、新たに学力向上チャレンジプランを作成し、その推進を行った。

全国学力・学習状況調査の結果分析において、算数科だけではなく国語科においても記述式の問題に課題があったことから、チャレンジプランにおいては、とりわけ記述力の向上について焦点をあて、「百文字作文」の取組を全校で行うこととした。

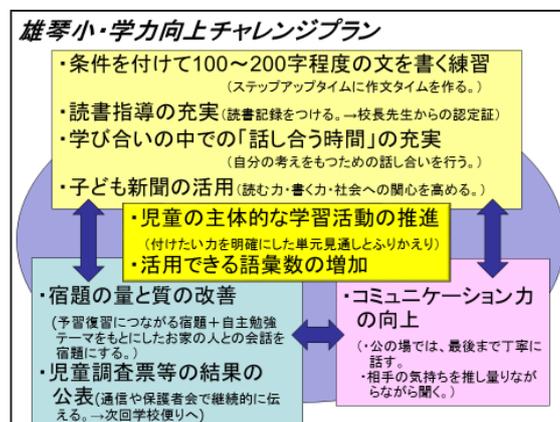


図4 平成26年度後半のチャレンジプラン

<百文字作文の取組>

月に2回のペースで、朝のステップアップタイムの時間を利用し、全校児童が一斉に百文字作文に取り組むこととした。また、日常から以下の取組のポイントをもとに、書くことの指導を進めることとした。

取組のポイント例

- ① 目的などを明らかにする。(相手・目的・意図 など)
- ② 文章の様式をもとに書く。(理由の説明・意見・感想 など)
- ③ 書くための条件に注意して書く。(引用・例示・箇条書き・字数・手順 など)
- ④ 読み手を意識し、分かりやすく書く。(主語・述語・一文の長さ・文の数・文末 など)
- ⑤ 何度も繰り返し書き、習慣化することが大切
- ⑥ 100字を基本として、必要に応じて150字、200字と増やしていくことで、内容に応じた必要な分量で書く学習につなぐ。
- ⑦ 他教科等については、この取組を基本として、目的に応じて、式や図、表、絵なども使って表現していく。

<取組の方法>

- ①各学級の様々な教科で時間を作り、継続的に取り組む。
- ②朝の時間などを活用して全校児童が一斉に取り組む。

ステップアップタイムでの百文字作文の取組においては、作文のテーマを全校で共通とし、コンテスト方式をとることにより、意欲を高めるとともに、各学級でのよい作品を紹介することを通してモデルとなるようにした。

コンテストでの入賞者(毎回、各学級1名)には、学校長からの表彰状が渡され、その取組により、苦手な子どもも一生懸命に取り組む姿が多くあった。また、指導に当たっては、書き方のスタイルを以下の例のように毎回規定し、子どもたちが書きやすくなるようにすることで、作文への抵抗感を減らすことを目的とした。「この書き方のスタイルを使うと、自分の言いたいことが書きやすくなった。」という子どもの声も多

くあった。

また、コンテストの入賞者を校内に掲示することにより、低学年の子どもたちからは、「高学年の作文はやっぱりうまいね」という声や、高学年からは、「1年生は、ひらがなしか使わないのに百字でよくまとめられるね」という声もあり、学年をまたがって認め合う姿があった。全校でテーマを同じにすることで、上学年の作文が記述の参考になっていった。

取組の例

「文章の組み立てに注意して書くこと」

文の構成

- ①最初に、好きな〇〇は△△と言いきる。
- ②次に、「なぜなら～」 「～だからです。」などの言葉を使いその理由を書く。
- ③最後に、よりくわしく説明したり、考えを書いたりする。

作文のテーマ 「私の好きな時間」

作文例（3年生）

「わたしの好きな時間は、土日の朝にさんぽをする時です。晴れた日はくうきがよくてきもちがいいからです。風がふくと葉っぱがひらひらとおちてくるのも、一つの楽しみです。きせつによってふってくるものがちがいます。」

二文目に、「例えば」を入れて、具体例を書いたり、「〇〇というのは～」を入れて説明したりするなど、付けたい力に合わせて文例を決め取り組むことで、他の学習へ活用できるようにしていくことにした。子どもたちは、「最後のまとめが難しい。まとめ方で大きく変わってくる」とよい文章にするために一生懸命に取り組む姿が多くあり、記述力を向上させることができた。

3 自然や地域と共生する力を育む

(1) 地域の特色を活かした系統的環境教育の推進

本校では、長年にわたり地域の特色を活かした環境教育の取組を推進している。とりわけ、「雄琴の自然から琵琶湖の自然を考えよう」と題して、琵琶湖のヨシが水や生き物とどのようにつながっているかを調べる探究的な活動を通し「問題を捉え、その解決の構想を立てる能力」「自ら進んで環境の保護・保全に寄与する態度」等を育むことを目標に体験活動に取り組んできた。

本校は、自然に囲まれた山の麓にあり、また、ヨシ原のある琵琶湖にも近いことから、豊かな環境に恵まれている。近隣には、河川もあり上流中流下流の様子とともに、その川が琵琶湖につながることから、水環境についても一体的に学習ができる。そのことから、それらの豊富な環境資源を有効活用し、全学年で系統的環境教育を行うこととして、次頁のような教育課程を編成した。

学習の展開においては、生活科や総合的な学習の時間を中心に、体験的な活動を中心にした課題解決学習を行った。自然と「ふれあう」ことを通して、自然に主体的に関わろうとする意欲・態度を育むとともに、自然の中から課題を見いだす。そして、課題を探究することを通して、思考力・判断力・表現力の育成とともに、生命の尊重、自然と人との共生の大切さについて学んでいくこととした。そして、将来にわたり、琵琶湖をはじめとする自然環境の保全に働きかける実践力を育むこととした。

<取組の内容>

取組については、「水」・「人」・「生き物」をキーワードに3つのつながりを柱とする単元構成を推進した。また、ヨシについては、全学年に渡り単元を系統的に位置付け、子どもたちも6年間を見通して学習に取り組めるようにした。

雄琴小学校の環境教育6年間						
	1年・2年	3年	4年	5年	6年	全学年
春						
夏		ヨシの ゆりかご (総合的な学 習の時間)	川探検 (総合的な学 習の時間)	環境学習 (総合的な学 習の時間) カヌーを使っ てのヨシの観 察		
秋			やまのこ (ふるさと体 験学習) (総合的な学 習の時間)	うみのこ (びわ湖 フローティン グスクール) (総合的な学 習の時間)		
冬	ヨシ原 探検 (生活科)				環境学習の まとめ ヨシ工作 (総合的な学 習の時間+ 図工)	ヨシ刈り (地域 行事) ヨシ松明 (地域 行事)
春						

図5 環境教育の系統表

1・2年生→ヨシ原の探検 刈り取る前の冬のヨシ原に入り、ヨシの大きさや鳥など生き物のすみかとしての役割を体感する。見学した子どもからは、「ヨシの中って、まわりより暖かいね。」と話すなど、その役割を実感することができていた。

3年生→ヨシのゆりかご ヨシの生態を知り、琵琶湖の水を浄化することや生き物を育むことを学習するとともに、ヨシの苗を学校で育て琵琶湖に植苗する活動を行った。

5年生→環境学習 3年生に植えたヨシを含め、夏のヨシ原を、カヌーを使って琵琶湖から観察した。また、琵琶湖フローティングスクールを中心とした琵琶湖環境学習につなげ雄琴の自然が琵琶湖の自然につながっていることを学んだ。

6年生→ヨシ工作 刈り取られたヨシを使って、近隣大学の支援のもとランプシェイドを作成した。完成したランプシェイドは、地域のホテルや施設等に展示させていただき取組を発信した。

全校→ヨシ刈り・ヨシ松明 地域で開催されるヨシ刈り・ヨシ松明に積極的に参加し地域とともに環境保全への意識を高めた。

その他にも、3・4年生を中心とした川探検や調査、観察等を通して、河川を使った環境学習を推進したり、5年生においては、地域の方の支援をもとに年間を通して稲を育てたりした。また、4年生においては、「やまのこ」の活動として葛川少年自然の家



写真4 1・2年生のヨシ原探検



写真5 5年生のカヌーでのヨシ原観察

での宿泊体験を行い、琵琶湖の水に対しての森林の役割を理解するとともに、実際に魚を掴み食する体験を通して「命をいただく」ことの尊さについて考える学習を推進した。

本実践の一部は、文部科学省国立教育政策研究所発行の「さあ、環境教育を始めよう！」【幼稚園・小学校編】に掲載していただいた。

（2）ふるさとを愛し、自らの生き方を考える子どもを育む地域学習の推進

学区にある「おごと温泉」を地域資源として、おごと温泉の歴史や発展に向けての取組を学ぶとともに、地域の活性化や観光に携わっている方の願いや努力、工夫に触れることを通して、ふるさとを愛しふるさとの創生に主体的に関わる学習を進めた。

本取組は、大津市教育委員会の事業「スクールイノベーション事業」の指定を受けるとともに、学習については、6年生の総合的な時間の時間において行い、「おごと温泉まなび旅」と題して、地域学習や職業体験をキーワードに年間を通して探究的に行った。

<取組の内容>

①地域学習

地域の「おごと温泉」の縁の地を訪ね、最初に温泉が湧き出て温泉施設ができた場所や関係する石碑、温泉の泉質と関係が深い井戸のある地元のお寺を訪ねた。子どもたちは、「いつも通学で前を歩いているのに知らなかった」など、改めて地域のすばらしさを感じることができ、ふるさとへの関心を高めることができていた。



写真6 地域学習

②職業体験

近隣の旅館の会長様に来ていただき、「おごと温泉」の戦後の混乱期から今日までの歩みや努力についてお話を聞かせていただいた。「事業を長く、安定して運営するには、お客様一人ひとりに合ったサービスを提供することを心掛けることと、仲間を思いやる気持ちを常に持ち続けることが大切だ」という部分は、子どもたちに仕事をしていくうえでの大切さを印象づけることにつながった。

また、近隣のホテルのご協力のもと、ホテルでの仕事の一部を体験させていただき、ホテルで働くものの心構えや「おごと温泉」のよさ、また子どもたちの住んでいる地域がいかに素晴らしいかということについてお話いただいた。

併せて、接客担当の方に、お辞儀の仕方やお客様への言葉かけなど接遇について教えていただいたり、調理体験をさせていただいたりした。

学年の終わりには、職業体験でお世話になったホテルを再度訪問し、従業員の方へインタビューをさせていただき、お仕事で工夫されていることや難しいこと、心掛けておられることなどを質問させていただいた。そのことで仕事をするものの大切さや喜び、苦勞など、子どもたちが将来に向けて、生き方の基本となることを学ぶことができた。

また、ホテルをご利用のお客様に「なぜ、おごと温泉に来られましたか」などの質問をさせていただき、これからの雄琴の発展について調べ、まとめることもできていた。

この取組は、地域の支援無くして実施できないことであり、改めて地域の子どもの育てるものの重要性に



写真7 職業体験

ついて考える機会となった。今後は、よりよい学習内容や展開について子どもたちとともに作り上げていく必要があるとともに、地域に根付く雄琴小学校の教育の一つ「観光教育」として地域に発信していく必要があると考えている。

その他にも、児童会活動を中心に日吉中学校ブロックでの地域との連携の取組や、5年生を中心とした雄琴幼稚園をはじめとした保幼小の連携の推進、クラブ活動等で様々な方にゲストティチャーとしてお越しいただく等、地域の中の学校として、地域の中で共生する力を育む活動を推進してきた。



写真8 インタビュー活動

4 子どもの力を引き出し伸ばす教職員の組織力

これまで、いくつかの取組を記してきたが、これらのことを教育課程に位置付け、確実に推進していくためには、学校長

のリーダーシップのもと、教職員が一丸となって「チーム雄琴」として意欲的に楽しく活動し、教育活動に達成感や充実感をもつことが大切である。そのため、管理職として次の3点について取り組んだ。

①教職員一人ひとりが個性を生かして、知恵を出し合う

本校は、伝統ある学校であるとともに、これまでから様々な実践があり、それを守っていくことも大切である。しかし、伝統を守るといいうことは、そのままの形を続けることだけでなく、常にその時代や子どもたちの状況に合わせて更新し続けていくことが、大切であると考えている。そのため、受け継がれてきたものを大切にしながら、教職員の一人ひとりが個性を少しずつ重ねることが大切であり、そのことが、職員の意欲にもつながると考えている。学校行事を含め、様々な教育課程上の取組に「みんなで知恵を出し合っていきましょう。」と声をかけ合い、創り上げていくことが大切であると考えている。

②教職員が達成感や充実感をもつ

管理職の大切な能力の一つにコミュニケーション能力があると思っている。当時の学校長から「教職員が納得しているか」「教職員に感動を与えているか」を考える必要があると教授していただいたことがある。管理職が、どのような言葉を一人ひとりの教員に言葉をかけるのはとても大切であり、その職員が今どのような状況にあるのか、この仕事をする中で大きな伸びが期待できるのか、など仕事の質と量をコントロールしていくことが重要であると考えている。

本校の教職員は「チーム雄琴」という言葉をよく使っている。教職員が組織の一員としての自覚を喜ぶとともに「全教職員が本校に在籍している子どもたちを育てる」という意識を常にもち、協力体制を高め、達成感や充実感をもつことが大切である。

・超過勤務を削減する

本校は、これまでから超過勤務が少ない学校である。それは、この時間までに終わろうと全員が常に意識しているからであると捉えている。そのために、どのように仕事を進めればよいのか、どうしたら効率的に仕事ができるのかを全員が考えている。大切にしたいのは、次の授業プランを考えたり、子どもの課題に気づき、寄り添い、解決したりしていくことであり、そのことに多くの時間を使えるよう工夫改善を行っている。

教師の授業がうまくなれば、子どもたちも日々の学習で生き生きと輝き、学ぶ力も伸びる。子どもたちの学ぶ力が伸びてくれば、満足感もち学校生活も楽しくなる。学校生活が楽しくなれば、生徒指導上の問題行動や課題も少なくなる。生徒指導上の課題に対する時間が少なくなれば、その時間が、次の授業づくりに使え、よりよい授業ができる。といったよい学級づくりのスパイラルを実現していくことが大切と考えている。

5 これからの学校教育

今後、学校教育を取り巻く環境は、大きく変化し、新たな課題が次々と出てくると考えられる。例えば、子どもたちや保護者の一層の多様性を受け入れ、生かした教育を進めなければならないことや、人口減少の中で、学級、学年の在り方も含め授業のスタイルを大きく変化させる必要があるということである。

そのために、これまで行われてきた一方的で画一的な授業から、子どもが自己との対話を重ねつつ、他者と相互に関わりながら、自分の考えを深めたり、グループの考えを発展させたりする双方型で多角的な授業改善の取組が一層必要になると考えられている。

これからの教師は、子どもたちの学びのプロセスを可視化するとともに、子ども一人ひとりの考えの違いを大切し、一人ひとりの考えを育てるための一人学びの指導の充実を図る必要がある。また、学習時には、子どもの学習状況を捉えたうえで、新たな視点や学びの方向性を示す言葉かけを通して、一人ひとりの子どもの良さを認め、自信や意欲を高めていけるようにしていく必要があると考える。

また、不断の授業改善とともに、地域の特色や学校の伝統をもとに、どのような子どもたちを育てたいかを明確にもつ必要もある。本校においては、琵琶湖とともに美しい山々、また、温泉という歴史や文化、産業がある。また、地域のコミュニティーもある。これらを大切にしながら、地域を愛し、地域と共に生きる子ども、地域に主体的に関わる子どもを育てて行く必要があると考える。

これからの時代、子どもたちの「生きる力」は、学校だけで育まれるものではなく、家庭における教育はもちろんのこと、地域社会とのつながりや信頼できる大人との多くの関わりを通して成長していく。学校は、地域の特色を生かし新たな学校文化を子どもたちと共に創り出していくとともに、その文化を地域に広げ、共有していくことが重要になる。その意味においても学校の役割はますます大きくなると捉えている。今後も、学校文化の創造に向けて尽力していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 滋賀県、「滋賀の教育大綱(第2期滋賀県教育振興基本計画)」。平成27年8月
- 2) 滋賀県教育委員会、「学ぶ力向上 滋賀プラン 夢と生きる力を育てる」。平成27年3月
- 3) 滋賀県教育委員会、「学校教育の指針」。平成28年3月
- 4) 中央教育審議会、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について 答申(案)」。平成27年12月
- 5) 文部科学省、「教育課程企画特別部会 論点整理」。平成27年8月
- 6) 嶋乃道弘、「学び合う授業づくり・その本質と方法」。初等教育資料, 2013年5月
- 7) 文部科学省国立教育政策研究所、「環境教育指導資料 幼稚園・小学校編」。平成26年10月
- 8) 井上一郎, 「記述力がメキメキ伸びる! 小学生の作文技術 様式別モデル文&授業アイデア 49」。明示図書, 2013年9月
- 9) 滋賀県大津市立雄琴小学校, 「名校長の学校づくり 学校行事を成功させるリーダーシップ」。総合教育技術, 小学館, 2014年9月